

槐 かい

岡井省二創刊

平成30年6月号

平成三十年六月一日発行 第二十八巻第六号 通巻第三二四号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

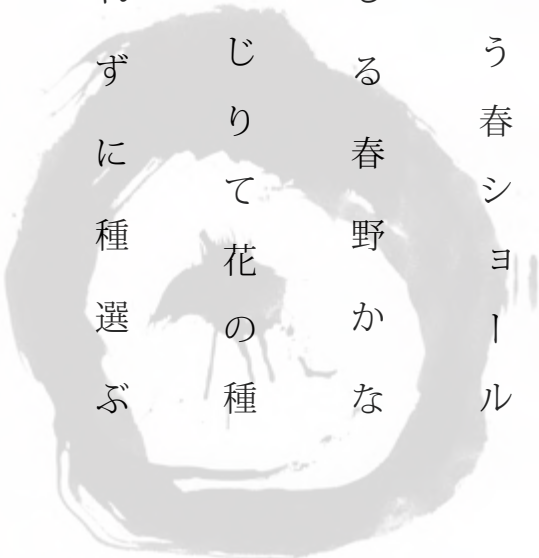


格を出す

高橋将夫

天網も春の塵まで掬へない
それぞれに悩み抱へて嘯れり
春泥の団子を供へ良寛忌
身近にも謀反の火種実朝忌

絶 対 に 水 に 流 せ ず 大 石 忌
妻 の 座 に 紋 白 蝶 が き て と ま る
十 歳 は 若 く 見 え さ う 春 シ ョ ー ル
魂 も 遊 び に 混 じ る 春 野 か な
い さ か ひ の 種 も 混 じ り て 花 の 種
色 艶 に 惑 は さ れ ず に 種 選 ぶ
格 に 入 り 格 を 出 で た る が う な か な



槐安集

水野恒彦

白椿寂寞として夜明けかな
詩人ひとり春の地球の人となる
春愁や解けぬままなり埴輪の眼
夢の間に過ぎゆく月日寝釈迦かな
能面の朱唇つぶやく朧月

加藤みき

きりぎしに春光と風行き渡り
大空や目下雲雀は休憩中
花筏エイトのこゑの行き来して
まつすぐに昇る烟や花の山
春の道あきら芭蕉につづきけり

中島陽華

演奏は運命なりきかがり花草
茜して言問橋の寒さかな
啓蟄や朝の目覚めの膝鳴つて
春迅風胸のジツパー開けて待つ
西郷せごどんのまなざしのさき竜天に

竹内悦子

御神木は連理の榊鳥の恋
囀りの風に包まれ椋大樹
酢の物は大き目玉の螢鳥賊
薬湯の硝子曇るや柳絮飛ぶ
文机を二階に運ぶ朧かな



雨村敏子

春光やわが腕にも土塊も
水滴の鈴のかたちや涅槃西風
紅梅の一木を得て百花とす
嗚呼といふ間合ありけり櫻かな
磯に出て磯のおぼろを吸うてをる

本多俊子

わたつみへ深き祈りを花辛荳
淡海のうみは観音の胸春の鳥
山すみれ大きくおはす磨崖仏
この星に九十の端に雛飾る
水芭蕉山河の鼓動包み込む

近藤喜子

なすべきこと有りぬと穴を出でし蛇
鶴帰る祈りの声を遠く曳き
茅花野や寂しさ包み込む光
天門を覗いてきたる雲雀かな
黄蝶舞ふ弾みし息の熱きかな

瀬川公馨

臍あつめて音の彫刻つくりたる
吉野出て春の日熱地獄かな
花粉症天地左右の杉の間
一本の肌理こまやかな春大根
春の空一隅にある無菌室

久保東海司

壁占めて競ふ魚拓や鰯の秋
鳩の湖末広がり投網打つ
骨壺を抱きしこと二度露の墓
菰の中火種の如き牡丹の芽
蚊柱の別の柱と相和せず

柳川 晋

蜆汁ビビツと仙骨立ちにけり
宇宙まで直線のなき蝮の道
春の灯をLEDが消してゆく
草おぼろ仮想通貨の申告期
凡百の道の先には蝶の道

熊川 暁子

待春や鳥語をさがす電子辞書
曲線に立ち直線に麦青む
生みたての卵の白さ花ぐもり
言霊の切り火の走る木の芽どき
紐結ぶ右の長きを春意とす

寺田 すす江

陸つらよりも湖に抛りたる椿山
太陽の欠片を混ぜて種を蒔く
校倉のあたり馬酔木の花揺らぐ
涵れてゆくものの切なし鳥雲に
白鼻心よぎりて行けり朧の夜

岩下芳子

大橋の撓んでゐたる臃かな
相の山霞の衣纏ひたる
桜湯の花満開となりにけり
花の下真名序仮名序を携へて
蛇穴を出てその日から恋模様

近藤紀子

雛壇に座敷童子も交じりゐて
母が家へ春田の畦をよぎり行く
春浅し空に吸はるる鳥の羽根
春川やマグマが湧かす露天風呂
海おぼるトルコ紀伊半島トルコ軍艦慰霊碑に続く青さかな

岩月優美子

初蝶や箔の一ひら風に舞ふ
人生の流れは早し涅槃西風
世の風に厳しさありぬ牡丹の芽
春潮やモアイの像に成り切らむ
なほ生きる積り花種蒔いておく

竹中一花

天空の山に天守や露の臺
女房の曳くト口箱や螢烏賊
白骨の御文おふみや御堂の花の雨
この国の形や臃の夜明け白骨の文 浄土真宗の経 明治百五十年かな
大空や春風とゆく坂の街

前田美恵子

春暁の産声窓を破りけり
貝寄風やコンビナートの煤煙
螢烏賊網の広さに光りをり
水引の結び目固し糸桜
春満月海馬目覚めてゐたりける

中田禎子

青空に電波ジャングル鳥帰る
花守に差しくる朝日缶コーヒー
語り行く男二人やリラの花
ものの芽や時効はとうに過ぎし文
火の匂ひ獲物の匂ひ海女の小屋



槐市集

中島昌子

守口の太閤堤 桜舞ふ
春風をかきまぜてをる園児かな
白髪 of 背中すつくと 桜守
青天のほくろとなりし揚雲雀
春雷やフオッサマガナを境とし

中谷富子

背割桜水に映りて光りけり
北窓を開けて兜太を招じ入れ
生命の不思議や春のはなの色
白内障萬華鏡から蝶生まる
茶柱の立つた寝たよと山笑ふ

中堀倫子

春の山まだ笑へずにをりにけり
日だまりに我と休むや春の風
耕しの畔くろに残るや鋤のあと
体型を知りつくしたる春の服
桜餅いい塩梅の甘さかな

中西厚子

目に見えぬものこそ真理涅槃吹く
本命を外し仔馬と生死わ分わく
彼岸寺後ろで笑ひ声すなり
手探りで春闇を行き火傷する
春社大枚叩き夢を買ふ



橋本順子

亀鳴くや見合写真の若づくり
梅の花炭酸の泡ぽつぽつと
ルーキーの直球勝負揚雲雀
遠き日の乳母車ゆく春の坂
風船を手放してより空深し

平野多聞

唐船が沖をかすめる菜の花忌
うつむくもこれが生きざま水仙花
古里を遠くしてをり土竜打つ
風薫り五臓六腑に春が来た
紡ぐ夢捨てきれぬまま卒業す

藤田美耶子

春嵐終末時計の針の音

橋本順子氏

冴返り立ちのぼりくるマラソン句
耳すます世代あらはす卒業歌
子雀の水あびうれし水たまり
乙女なる言葉は死語にリラの花

安野眞澄

梅三分やさしき影の生まれける
自転車に軋みありけり涅槃西風
老木の力まらず春を待つちから
雉子車かたことならし春を行く
日向ぼこ空つぽなりしわが海馬

三木亨

小鳥には滑り止めなり柳の芽
園児等の声容赦なく涅槃講
春の泥絶滅危俱の一種なり
桂打ちに痺るる心春北風
同行は喜六清やん伊勢参

柳橋繁子

下萌の桂川かつらの堤比翼塚
前を行く遍路錦の納札
浅き瀬にさざ波たちぬ春の鴨
つちふるや御霊神社ごりやうの能舞台
のどかなる御手のみづかき盧遮那仏

槐集

高橋将夫選

白梅の花蕊におはす仏かな
大阪 藤田美耶子

春暁のうすむらさきは夢心地
春疾風塞ぎの虫を追ひ出しぬ
庇ふごと袂広げし男難かな
累累とつゝのる情念落椿

平野 多聞

金縷梅の色に染まりし無我の土
紅梅や凡夫に生きて無我の土
朝の燭心の蓋を取る遍路
虚と実の折り合ひつけし遍路かな
鸞鳴くや心に掛けし色眼鏡
闇なくば生きられぬ墓穴を出づ
鷹化して鳩となるきはありませぬ
菜の花は蝶に化し人惑はさる
石鹼玉こんなに軽い愛もある
まなざしに色が見えたり春の宵

大阪 江島 照美

鳥帰る常の生活たつきの音の上
大阪 有松 洋子

ものの芽のいつせいに吹く地震のあと
詩を読むは心の解毒風光る
げんげ摘む明日の青空疑はず
夜桜と内緒話をする女

守口 三木 亨

すれ違ふ魂とドローン入彼岸
理科室の音叉に共鳴春の闇
問ひの解天に吹聴揚雲雀
啓蟄の目覚めを早む古の記憶
蛇行こそ最短と蛇穴を出づ
郷愁の思ひ秘めしか鳥帰る
春はしる万物に寄す命の波
春日恋ふ生きしもの皆明日の風
春光の後光まぶしき金色に
引鶴をないまぜにして一つ地球

岡崎 柴田 靖子

銀河往來

高橋将夫

◇『圓座』（武藤紀子主宰）四月号

季節の中で 俳句咄々々

秋山百合子

鏡餅雲を夢みてをりにけり

高橋 将夫

（俳句界）一月号投句選者新春詠「希望と期待」より）

正月の餅は、大概暮れの二十八日に掲ぐ。二十九日は九が苦を連想させるので避けられる。この地方では、熱田神宮への大鏡餅が講の人々により奉納される。何人かで担いで来るほど非常に大きい。鏡開きまでの十日以上そこに坐りつづける。掲句は、このように大きなものを想像させる。大空の雲のように自在に流れて好きなところへ行きたいと、鏡餅は思っているだろうというのだ。おもしろい発想で愉快である。空に二つ重なって深く白い雲は、鏡餅の夢の姿だ。

◇『道』（源鬼彦主宰）四月号

名句鑑賞 佳句鑑賞 越前 唯人

消えないと氷つてしまふ冬の虹 高橋 将夫

（楳）平成三十年二月号）

「虹」は危うさと希望を併せ持つ夏の季語。「冬の虹」にすることによって危うさと希望がより強調された一句です。真っ青な冬空に東の間浮かんで消えていった「虹」。虹は空気に残った水滴に太陽光が反射して起こる自然現象ですが、まさしく凍てつく寒さの中ではすぐに凍ってしまいそうです。砕けるか散るか。厳しい寒気の中で耐え忍ぶ我々に、まさしく束の間に見せてくれる希望の手がかりだったのかもしれない。

◇桃集観照

鹿ふごと袂広げし男難かな

藤田美耶子

袂を広げる男難の姿を見て、何かを、誰かをかばっているようにだと想像した。ほほえましい。この作者ならではの感性。

（白梅の花蕊におはす仏かな）の句からは清麗な心根が伝わってくる。そんな作者だが、春曉のうすむらさきは夢心地や（粟栗とつる情念落椿）のような豊かな抒情の世界も持ち合わせている。

虚と実の折り合ひつけし暹路かな

平野 多聞

いろんな思いを抱いて暹路に出る。人生の虚と実の折り合いがつけられたなら、それこそ暹路に出た甲斐があったというもの。

（紅梅や凡夫に生きて無我の土）や（金縷梅の色に染まりし無我の上）や（朝の燭心の蓋を取る暹路）の句もその成果なのだろう。やはり仏の多聞。

（鶯鳴くや心に掛けし色眼鏡）の句、そもそも色眼鏡とは目でなく心に掛ける物だという。核心を突いている。

石 缺玉 こんなに軽い愛もある

江島 照美

確かに愛には人類愛や母性愛などいろいろな愛がある。軽い愛というと軽薄な感じを与えるが、私は子供の石 缺玉遊びに付き合っている親の姿にほのほとした愛を見た。

（間なくば生きられぬ墓穴を出づ）の句は真の本質に迫っている。（塵化して場になるきはありません）は季語を逆手にとった句で、シニカル。

鳥 帰る 常の 生活の音の上

有松 洋子

渡り鳥が雲の彼方へ去っていく。「生活の音の上」がいい。

日常の生活音とは無縁の詩歌の世界がそこにあるようだ。

（夜桜と内緒話をする女）には物語性がある。どうやらそこは男性が入り込めない世界のようなだ。

すれ違ふ魂とドローン人彼岸 三木 亨

どこまでが科学で、どこからが魂の世界なのだろうか。魂とドローンがすれ違ったのはその境界あたりかもしれない。彼岸だから魂が彷徨っていたのだらう。（理科室の音叉に共鳴春の闇）も科学と闇の世界に迫る一句。

（間ひの解天に吹聴揚雲雀）と（蛇行こそ最短と蛇穴を出づ）は常識を超越しているところが魅力。

引鶴をないませにして一つ地球 柴田 靖子

大空の彼方を去っていく引鶴を地球という大景で捉えたところが魅力。

（春はしる万物に寄す命の波）と（春日恋ふ生きしもの皆明日の恩）では命がおおらかに詠まれている。命の賛歌。

エジソンの竹ものどけし石清水 高野 昌代

石清水八幡宮の竹から電球のフィラメントの竹への飛躍に感心させられた。

（しがらみや柳絮に乗りて雲の上の匂、たしかに「柳絮に乗って雲の上」に行けば、そこは何のしがらみもない世界。うらやましいほどおおらかな一句。

岩激る垂水の迅さ残る日日 大塚李里子

時間は早く過ぎてゆくものだが、それを「岩激る垂水の迅さ」ととらえた。残る日々がなんともいとおしい。

（はるかなるものを目指し青き踏む）の句、破調ではあるが、

心をひかれた。

今日の彩明日へつなきてつつじ燃ゆ 吉田 順子

「今日の彩を明日へつなぐ」という、なんとも希望に満ちた一句。

（野の果に夕日ととまる涅槃かな）にも心をひかれた。

啓蟄や世界動かす話など 中 貞子

小さな虫が穴から出てくる啓蟄の候。それと「世界動かす」という大きな話の取り合わせが絶妙。

予言して結果を変へる余寒雲 中西 厚子

念力というオカルト的だが、何にしる思わなければ、その方向には進まない。その意味では、思うから成るのである。ほら、予言した通りに寒空の雲がゆつくり形を変え始めたではないか。

春一番人事部長が吹かしけり 田中 信行

人事異動はサラリーマンの最大の関心事。常に大きな波紋を呼ぶ。人事異動から会社の新年度が始まる。春一番が吹いて本格的な春が来る。人事と自然が融合した一句。

（雪解けて現実の世界現れぬ）は雪解けの本質を見ている。

何時よりか胸に届かじ雛の声 久保 夢女

何時の頃からか雛の声が胸に届かなくなったという。あの頃が懐かしくはあっても、もうあの頃の感激は得られないのだ。

白日夢蝶きて色のつきはじむ 橋本 順子

美しい絵画を見るような、ロマンに満ちた一句。